稲作　営農情報

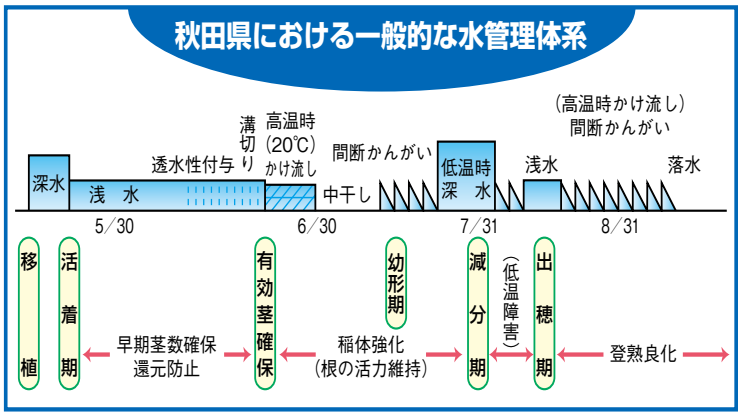
田植作業～管理

―田植え作業は急がずに、温暖な日を選びましょう―

・田植え作業は、日平均気温 14℃以上(中苗)、できれば最高気温 20℃以上の温暖な日に行いましょう。最高気温 15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。
・田植え直後は、活着を促進させるため、水深４cm程度の湛水状態として保温に努めましょう。
・補植用余り苗は、いもち病が発病しやすく伝染源になります。補植を行う場合は、田植え後速やかに実施し、補植終了後は直ちに泥に埋めるなどして処分してください。

―分げつを促進させる水管理について―

・高品質･良食味米の生産技術として初期分げつの確保が重要です。
・分げつを促進させるためには、水温の日較差がポイントとなります。「早朝かん水･日中止水」を基本に、気温が 15℃以上の場合は浅水管理、15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。
・分げつの発生最適条件は、最高水温 30℃、最低水温 15℃、日平均水温 23～25℃です。
・アオミドロや表土はく離等が発生した場合は、早朝や降雨日に水の入れ替えを行って発生を抑えましょう。



―除草剤散布は、効果を最大限発揮させましょう―

・雑草が小さいうちは、除草効果も高くなります。適期の散布に心がけましょう。
・除草剤散布後１週間は止水し、湛水状態を保ちます。落水、かけ流しは行わず、畦畔等からの漏水にも十分注意してください。

病害虫防除等について

―いもち病防除の徹底と補植用余り苗の早期処分―

本田の葉いもち病を防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。以下の点に注意して葉いもちの発生を予防してください。

① 育苗中に葉いもちが確認されたハウスの苗は移植しない。
② 本田葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施する(いずれの防除効果も持続期間は７月中旬頃まで。なお、育苗期いもち防除剤として、育苗ハウスで使用したベンレート水和剤やビームゾルは本田での防除効果は無い)。
③ 管内一部地域で、ドロオイに対するプリンス剤の感受性低下が認められるので、箱施用剤の選定に注意する。
④ 補植用余り苗は、いもち病の伝染源になる。補植を行う場合は、田植え後速やかに実施し、補植終了後は直ちに泥に埋めるなどして処分する。

【水稲育苗施設内での農薬使用の注意事項】

１．水稲育苗終了後に野菜類を栽培する方で移植当日に箱施用剤を用いる場合は、育苗施設外で散布処理してください。
２．斑点米カメムシ類防除は田植え後の雑草対策から斑点米カメムシのアカスジカスミカメは、ノビエ･ホタルイ等の雑草を好むため、対策として水田内雑草の除草と、田植え後からの畦畔･農道の草刈りが重要です。Ⅱ―３の注意点および以下の点に注意して対策を講じてください。
　① 農道･畦畔の草刈りは６月上旬から稲が出穂する 10～15日前までに数回行う。
　② ８月には出穂期 10日後頃の茎葉散布剤の散布後に草刈りを行う。